

シンポジウム報告

ミステリーと神秘 (mysterium)

探偵小説をめぐる文学・哲学・神学の交錯



井関大介

ISEKI Daisuke

本 シンポジウムの企画者であり、司会を務める斎藤喬氏によると、南山宗教文化研究所が主催するこのシンポジウムは、探偵小説の意味でのミステリーと、宗教的な意味での神秘 (mysterium) との関わりを考えていくために企画された。ミステリーという語は、一般的には文芸ジャンルとしての推理小説・探偵小説の意味で用いられることが多いが、たとえばルドルフ・オットー『聖なるもの』の *mysterium tremendum* (華園聡磨訳では「畏るべき神秘」、久松英二訳では「戦慄すべき神秘」) が知られるように、宗教学においても重要な概念として用いられ続けてきたのである。

本シンポジウムは次のようなプログラムでオンライン開催された。三人の発表者は、文学・哲学・神学という三つの分野でそれぞれ探偵小説を扱ってきた研究者達である。

日時：2021年11月13日(土) 午後13時～15時30分

発表：①小松史生子(金城学院大学)

「日本探偵小説と新宗教—疑似ナショナリズムと戦後ミステリーの展開—」

②中村大介(豊橋技術科学大学)

「手がかりとしての謎／不可能なものとしての謎—探偵小説における「謎」の二重性について—」

③金承哲(南山宗教文化研究所)

「『文学神学』の可能性についての試論—探偵小説を媒介として—」

コメント：鶴岡賀雄(清泉女学院大学、東京大学名誉教授)

司会・趣旨説明：斎藤喬(南山宗教文化研究所)

発表①

一人目の発表者、小松史生子氏は、日本近代文学および近代大衆文化を専門とし、著書『探偵小説のペルソナ—奇想と異常心理の言語態—』(双文社出版、

2015年)では、江戸川乱歩を中心とした文学作品の社会史的な位置づけを論じている。今回の発表、「日本探偵小説と新宗教—疑似ナショナリズムと戦後ミステリーの展開」は、戦後日本探偵小説の特徴を考えるにあたって、新宗教を扱った作品が少なくないことに着目し、戦後社会を生きる庶民の宗教感覚および新宗教ブームに見出されるナショナリズムと、戦後探偵小説の物語構造との相関性を読み解くことを目的とする。

本発表で主に扱われている作家は、戦後すぐにデビューした高木彬光と松本清張、および当時すでにベテラン作家であった横溝正史である。高木は本格推理物の旗手、松本は社会派推理小説の開拓者であって、対照的な両者であるが、戦後日本社会の庶民感覚と思想動向に対する鋭いアンテナをもつ点において共通し、そのアンテナゆえにある時期新宗教というテーマに注目したと、発表者は評価している。

戦後の宗教史的状况としては、GHQの戦後宗教政策による国家神道体制の解体後、新憲法と宗教法人法の施行によって多数の新宗教教団が生まれ活況を呈する、いわゆる新宗教ブームがあった。それらは法華教系と神道系教団に大きく二分されるが、多くの教団の内部構造には戦前の君民一体構想に酷似した疑似家父長制的特徴が見られ、国体論的ナショナリズムの代替物ともなり、故郷から離れて暮らす中間階層以下の人々の疑似家族的共同体への希求に合致していったことが、宗教学者達によって指摘されている。

そのような社会状況を、戦後の探偵小説がどのように解釈しているのか、具体的な作品についての検討がなされていく。筆頭にあがるのが高木彬光『呪縛の家』(1949～50)で、「紅霊教」という神道系の新宗教が登場する。また、ベテランの横溝正史『迷路の花嫁』(1954)の心霊術師とその信者集団も、やはり神道系教団として描かれている。どちらも新宗教やその背景にある民間信仰を、色と金にまみれた「淫祠邪教」というレッテルで捉え、激しい嫌悪と批判をあらわにしているという。

これに関して、当時の研究者やジャーナリストによる、近代化を阻むものとして新宗教を批判する言説が、戦前から連続して多く見られ、ほとんど常識化していた状況であったことを、発表者は指摘する。村上重良『近代民衆宗教史の研究』(法藏館、1957年)では、新宗教教団が国家神道に妥協した結果、教団の封建的構造や呪術性・神秘性が強化・温存されて、近代化が阻まれたという批判がなされていた。大宅壮一が現世利益信仰に絡む「色と金」の観点から新宗教を批判したように、同様の言説は当時の新聞や雑誌上でも散見する。探偵小説はもともと封建主義的共同体構造に対して抵抗する姿勢を持ち、近代合理主義の側に立つ文学ジャンルであるため、戦後の新宗教を批判的に解釈し、名探

偵によってそのいかがわしさを暴かれる対象として描いてしまうことには必然性があった。

また、『呪縛の家』の描く新宗教には、軍の隠匿物資の話題など、太平洋戦争の影が落ちているが、作者が新宗教を疑似ナショナリズムと見なしているからではないかと、発表者はその理由を推測している。新宗教は所属する共同体を喪失した民衆を受け容れてくれる、新たな共同体としての機能を果たしたが、血統で教祖が継承されるその教団構造は天皇制のアナロジーとなり、戦後の人間天皇出現に戸惑う民衆に代替ナショナリズムとして受容された。『呪縛の家』の新宗教批判や大衆蔑視は、新宗教教団のナショナリズム親近性に対する激しい嫌悪のあらわれと考えられる。そのように新宗教の代替ナショナリズムに取り込まれていく庶民の宗教感覚を反近代的なものを見出す点に、探偵小説の物語構造の一つの限界があったと発表者は指摘する。

一方、松本清張の『隠花平原』（1967～68）も、「普陀洛教」という仏教系新宗教を描くにあたって「色と金」という言説を展開している。中でも本作品に特徴的なのは、「金」の面を重点化していることであり、公金横領という犯罪を伴う新宗教教団と銀行の癒着を描き、戦後経済小説としての萌芽を見せている。比較対象として、発表者は『隠花平原』よりわずかに早く連載が開始されていた高橋和巳『邪宗門』を挙げる。これは教団に集う人々と日本社会の貧困構造とを、教団の弾圧史として描く純文学で、新宗教の側に寄り添う姿勢で書かれていた。発表者はこの比較によって、探偵小説的物語構造の中に新宗教への批判的言説が色濃く投影され、その枠組みを決定しているということを際立たせている。

両作家の後の作品展開に触れて、本発表は締めくくられる。松本清張は新宗教というテーマを国体論的ナショナリズムと天皇制を問う歴史小説の方向へシフトさせようとして、『神々の乱心』（1990～92）を連載する。一方、高木彬光は詐欺集団に騙される庶民の姿に新しい宗教的陶醉、盲目的信仰を見出し、天才的詐欺師をヒロイックに描く『白昼の死角』（1959～60）で、新宗教テーマを経済幻想の方へと飛躍させるのである。

発表②

二人目の発表者である中村大介氏（豊橋技術科学大学総合教育院准教授）は、フランス哲学、とくに数理哲学を専門とするが、著書『数理と哲学—カヴァイエスとエピステモロジーの系譜—』（青土社、2021）の「補論 探偵小説生成論序説—パースの記号学から出発して」において、江戸川乱歩を題材に探偵小説をも論じている。

本発表、「手がかりとしての謎／不可能なものとしての謎—探偵小説における

「謎」の二重性について—」では、まず探偵小説における「謎(mystery)」とはどういうものか、という問いが立てられる。解ければ誰もその内容を覚えていない計算ドリルの「問題」などとは異なり、探偵小説における「謎」は、探偵によって解明・解決された後も「魅力的な謎」として多くの人に記憶される。ただし、それは解決が魅力的なものであった場合に限られ、解決が凡庸であれば、その魅力は霧散してしまう。つまり、謎と解明が緊張をはらんだ相関関係にあり、魅力的な解明がなされれば、その謎は読者の記憶の中でいわば〈死後の生〉を得ることになるというのである。そのような性質を持つ謎に対して、本発表は二つの視点からアプローチする。一つめは「名探偵が見抜く謎」、二つめは「ありえなさ、不可能性を示すものとしての謎」である。

まず、発表者が探偵小説の生成のあり方を捉えるために利用している、アメリカの哲学者、チャールズ・サンダース・パース(Charles Sanders PEIRCE)の記号学の概要が説明された。それは記号・対象(記号が指し示す対象)・解釈項(人の中に作り出され、記号と対象を繋ぐ解釈項)の〈三つ組〉からなる記号学であり、パースはそれをさらに三つずつに分け 3×3 の格子状の記号類型を作る。この〈三つ組〉に探偵小説の三項関係を対応させると、次のようになる。

- 第一次性(記号)： 記述・描写(記述者が書く)
- 第二次性(対象)： 事件(犯人・被害者などの言動)
- 第三次性(解釈項)： 手がかり・推理など(探偵が読む)

これらをさらに一次・二次・三次に分けることで、やはり 3×3 の記号図式ができる。その記号図式において、「謎」と「手がかり」はともにパースの記号類型でいうところの「名辞」にあたるという。なぜ両者が同じ記号類型に属するかというと、「謎」は往々にして名探偵のみが見出し得るものであり、つまり、「手がかり」同様、「読む」ことが必要なものだからである。それゆえ、「謎」は名探偵が推理にあたって最初のとっかかりとする、「原-手がかり」であるということが出来る。これが一つめの視点である。

続けて、発表者は二つめの視点の説明に移り、探偵小説の歴史における謎の多様な展開を概観した上で、それらの謎が大きく二つに分けられると主張する。「事件として生じることが不可能と思える謎(存在論的不可能性、ありえないこととしての謎)」と、「出来事の連環を見出すことができない謎(認識論的不可能性、理解しえないものとしての謎)」であり、いずれにしても謎は「不可能なこと」であるといえる。それゆえ、魅力的な解明の後でも読者が謎に魅惑され続けるのが「探偵小説を読むという経験」であるとすれば、「ありえないこと／理解しえないもの」が解かれるという快楽を通じて、読者は「不可能なこと」(それ自体)に実は魅

せられているのではないかと発表者は推測する。

数列のように表現すれば、謎 1、謎 2、…謎 n…と探偵小説の謎（解くことのできる謎）が連なった先に、その極限として〈不可能なものとしての謎〉（以下、発表者の表記に従って〈謎〉と略す）が想定される。探偵小説では様々な意味で「不可能」と思われる謎が解明されるが、その最中に読者はこの〈謎〉を経験するのではないかと。解明後もなお「魅力的な謎」に惹かれるのも、この〈謎〉に何らかに触れる経験をしているからではないかと、という仮説である。しかし、この〈謎〉は〈不可能なもの〉なので、通常の意味で存在するものではなく、常に一つの同じ実体としてあるともいえない。これはいわば「あらぬものがある」という領域の探求に踏み入る議論であるとして、発表者はスピノザの哲学をヒントに考察を進めていく。

「優れた探偵小説は「謎－解明」のダイナミズムにおいて〈謎〉を経験させる」という発表者の仮説から、各作品の謎一つ一つにこの〈謎〉がカップリングされていることになるが、生み出され続ける個々の謎は全体化不可能なものであり、それゆえカップリングされた〈謎〉はどれも「同じ一つのもの」ではない。〈謎〉は全ての探偵小説の謎に通底する「一なる全体」ではなく、スピノザの用いた概念、「能産的自然」を想起させるものである。「能産的自然」とは、「所産的自然＝生起したもの」が「それなしではありえない」ものとして依存する自然であり、神と同一視される。それに擬えて考えれば、探偵小説で生起する謎が依存しているものとして、〈謎〉の存在を想定できるというのである。それをパースの記号学でいえば、〈謎〉は探偵小説の諸記号を産み出す第 0 次性の水準に位置する。

以上のことから、探偵小説における謎は、①名探偵が見抜く「原 - 手がかり」としての謎と、②そうした謎が依存する〈不可能なものとしての謎〉という二重性から成っており、「原 - 手がかり」としての謎は、〈謎〉への手がかりであると論じられる。この〈謎〉を追い求めることによって、探偵小説の様々な謎が産み出され、ジャンルとしての探偵小説が展開してきたのであり、探偵小説の歴史はすなわち〈謎〉の完全犯罪の歴史であると、発表者はまとめている。

発表③

三人目の発表者である金承哲氏は、当シンポジウムを主催する研究所の所長であり、キリスト教神学を専門とする。著書『遠藤周作と探偵小説－痕跡と追跡の文学－』（教文館、2019）において、神学の観点から遠藤文学の本質的な部分における探偵小説のありかたについて論じている。

今回の発表、「文学神学」の可能性についての試論－探偵小説を媒介として－では、キリスト教神学者として、探偵小説の読解がどう神学に利用できるか、

ということが主題である。それぞれの時代との対話を通して、信仰や神について語るのが神学の課題であり、現代においては他宗教および自然科学との対話が重要である。しかし、従来のパラダイムは伝統的な神学の枠組みを崩そうとせず、本格的な意味での対話にはならなかったという反省がある。より根本的な対話を行おうとすると、神学が危機にさらされるが、その危機を積極的に飲み込むことで、その神学の不可能性を可能性として受け容れられるのではないかということ、発表者は探求している。

それは論じ難い問題であるが、メルロ・ポンティ（『小説と形而上学』）によれば、観念を主題化することではなく、それらをちょうど物のようにわれわれの眼前に存在させることが小説家の職務であるという。そのように、神学を不可能にするものを真正面から表す道が文学にあり、文学との対話を通して表現の可能性が与えられるのではないかと期待し、発表者は「文学神学」ということを試みるのである。

中でも探偵小説は根本的に宗教的な性格を持つものであって、キリスト教と密接な関係があるとして、いくつかの例が挙げられた。何か罪が犯されて痕跡が残っている、それを辿ることで犯人が誰か分かるという物語が旧約聖書に少なからずある。信仰をめぐる有名な作品として、アウグスティヌスの『告白』、ボナヴェントゥラの『魂の神への旅程』、ダンテの『神曲』もまた、人間の魂が神を求め探してその痕跡を辿っていく物語である。これらの例から、キリスト教の救いの物語や神学の内容が、探偵小説的な構造を持っていると発表者は主張する。発表者が研究してきた遠藤周作もまた、自分の体、心、魂に残されている洗礼の痕跡の意味を一生探し続けた作家とされる。『侍』や『沈黙』などの作品もやはり、その痕跡を辿り続け、そこに痕跡を残した者（キリスト、神、あるいは母）を探そうとする、探偵小説的な構造を持っている。

では、遠藤はなぜ探偵小説に興味をもち、その手法を使って作品を書かねばならなかったのか。彼の追求した信仰の世界や、日本におけるキリスト教信仰のもつ意味とは何かといった内容が探偵小説的なものであるからこそ、それが表現手法として選ばれたのだと発表者は論じる。その内容と表現の関係は、遠藤がキリスト教の否定神学的、あるいは神秘主義的な伝統につらなるとされるベルナノス (Georges Bernanos) の『ウィーヌ氏』を熱心に読み解こうとした事実を示唆されているという。それは、神については「それについて何も語るができない」という形を通してしか語るができない、マイナスをもって神のプラスをいうしかないという考えである。発表者は探偵小説の根本にもそれがあるとして、Harry T. CRAVER の論 (*Reluctant Skeptic: Siegfried Kracauer and the Crises of Weimar Culture*, Berghahn Books, 2017) を引用し、探偵小説は世俗化された現

代社会における一つの否定神学と捉えられることを主張する。神がいなくなった世界において、神が残した痕跡しか我々は見ることができない。しかもその痕跡も積極的な形ではなく、ある空洞、マイナス面、凹みとしてしか残されていない。それゆえ、神学的な内容を表すための一つの手がかりとして、探偵小説を使うことには十分な可能性があるという。

続けて、遠藤周作の『沈黙』がいかに関探偵小説的であり、また神学的であるかということが論じられた。この作品では、最初にフェレイラの棄教・失踪という理由のわからないことが起きる。その真相を究明するため、ロドリゴが弟子のキチジローを連れて日本に上陸し、探偵とその助手のようにフェレイラの後を追うが、そのロドリゴをさらに奉行の井上筑後守が追うという、サスペンシ的な物語が展開する。ロドリゴを追いかける井上も実は元キリシタンであり、棄教後は逆に弾圧する側になったが、彼の中にも神の痕跡は残っている。それゆえ、彼ら三人が目に見える何かを追いかけているかのようであり、実は目に見えない神を追いかけているという、あるいは、追いかけているようであり、実は神によって追いかけているという、神学的な主題を見出すことができる。

ここで発表者は、アダプテーション (adaptation) という概念を持ち込む。狭義のアダプテーションは、小説がミュージカルになるというふうには、ある作品がジャンルを超えることを意味する。『沈黙』は海外では *religious thriller* という表現で紹介されており、様々なスリラー作品を作ってきたスコセッシ監督が『*Silence*』という題名で映画を制作した。探偵小説『沈黙』からのアダプテーションとして映画『*Silence*』があるといえるが、では、『沈黙』は何のアダプテーションであるか、と問うのである。

リンダ・ハッチオン (Linda Hutcheon) は、オリジナルに対する二次的な模倣としてアダプテーションが生まれるのではなく、全ては全てに対するアダプテーションであって、人が何かを理解する際の基本的な構造としてアダプテーションがあると論じている。アダプテーションとして新しいものが書かれても、そこには前のものの痕跡が残っている。それでいて、新しく書かれたものも独創的であり、別の世界、新しい世界を生む。「物語は他の物語より生まれる」という、重層的な構造で神学と文学の関係を考えることが可能となる。

最後に、文学的表現を用いた神学者として、ドイツのゲルト・タイセン (Gerd Theissen) という聖書学者が紹介された。彼はイエスの病気治しなどの奇跡譚を当時の社会的な文脈の中で解釈するという作業を行なったが、それを探偵小説的な作品に仕上げている。その主人公はローマ人によってキリスト教の集団に送り込まれた密偵であり、イエスがどのようなものであったかを探偵のように追いかけるが、その結論は、いくら探しても分からない、影としてしか分からないと

いうものである。これも一つの例として、発表者は神学のアダプテーションを可能にする道を今後も探っていくという。

コメント

コメンテーターの鶴岡賀雄氏は、キリスト教の神秘主義(mysticism)の研究を長年おこなってきた宗教学者であり、著書には16世紀スペインの神秘家について論じた『十字架のヨハネ研究』(創文社、2000年)などがある。

三人の発表をうけて、コメンテーターはまず、人間は何かを考えたい生き物であり、探偵小説は「ここに謎があるよ」とわかりやすく示し考えさせてくれるもの、考えるということの一つのモデルであるという見方を示す。続いて、ミステリーということばの系譜について、次のような概説がなされた。

この語の系譜を辿ると、ギリシアや地中海世界に古代の初期から存在してきたmystery religions、あるいは単にmysteryと呼ばれているもの(「密儀宗教」と訳される)に行き着く。それらは共同体の全員が属するような宗教ではなく、個人がそれぞれの意志で参加する当時の「新興宗教」と呼べるようなものであるが、その密儀で最終的に明かされる宗教的真理がmysterionなどと呼ばれた。その語がキリスト教に入ってmysterium(神秘、秘儀、奥義などと訳される)となり、現在もキリスト教で最も重要な教義を指すことばとして使われている。神が人になったというような、理解不能な、あり得ない謎がそれである。

それゆえ、ミステリーということばは、もともと中村氏のいう「不可能な謎」を意味することばとして、古代ギリシアで生まれていたともいえるが、有名なエレウシスの密儀で最後に明かされた謎とは、人間の生と死の謎であった。生物が死ぬということ自体は何の不思議も無い自然現象であるが、それを謎として受け止めてしまうのが人間であり、何らかの答えを見つけようとして、探偵のようにあがくのではないか。ミステリーとはそういうものであり、探偵小説=ミステリーもその手近なモデルではないかというのである。その後、コメンテーターから個別の発表に対してコメントと質問がなされた。

小松氏への質問

小松氏の扱った時代における「新興宗教」観は説明のとおりで、その後、民衆にこそ真理があるという左翼的な思想もあって、高橋和巳と同じように信者側に寄り添うという研究が宗教学の中でも強くなり、オウム真理教の事件でまた逆転するという変遷があった。日本だけでなく世界的にも、あらゆる秘密宗教教団は淫祠邪教視され、キリスト教も誕生時はそうだった。それは惹かれていることへの裏返しであるとも考えられるが、探偵小説の歴史を辿る中では、犯罪者

側への寄り添いや、犯罪者側にある種の魅力を感じているという事例はないか。探偵小説の魅力はある意味で犯罪の魅力、悪の魅力ということがあるように思われるが、それを自覚化するような探偵小説史というのではないのか。より一般化すると、探偵小説はなぜ犯罪から始まるのか、犯罪とはそもそも何で、どうして悪なのか。

小松氏の応答

江戸川乱歩の怪人二十面相をはじめとして、犯人側に寄り添い、悪の魅力を描く探偵小説は少なくないにもかかわらず、新宗教を扱った小説にはそういった寄り添い方が見られない。その理由として、新宗教のセクト性、団体性への激しいアレルギーのようなものがあると考えられる。探偵の物語構造における位置は、孤高のヒロイズムを背負った個的存在であり、犯人もまた秀でた個という親近性があるため、両者の逆説的な絆や悪の魅力を描くことはあり得るが、それは新宗教のセクト性と相容れない。高木彬光『白昼の死角』はプロの詐欺師が非常に魅力的に描かれたノワール小説であるが、これは新宗教を経済幻想へとアクロバティックに飛躍させた上で、そちらの側に寄り添った物語構造であるといえるのではないか。

中村氏への質問

謎の魅力とか、それを経験するというのはどういうことなのか。中村氏が専門とする科学哲学や数学が顕著であるが、普通は謎と思わないようなところにあえて謎を見出し、謎に仕立てていくのが科学のようにも見える。

中村氏の応答

数学において未解決問題を解いていくということと、ミステリーにおいて謎を解くということとの違いとしては、後者が何らか不可能なものであるという点が重要である。ミステリーにおいて、探偵の推理は不可能だったことをあったことにしてしまうが、しばしば探偵と犯人は似ていて、そこに根本的にはいくばくかの怪しさ、魔術的側面がある。それとの関係で、謎の魅力というのが出てくるのであろう。つまり、推論のあり方が、文学の推論と数学の推論ではやはり異なっていて、その怪しさがミステリーの魅力であろう。

金氏への質問

キリスト教では最初の探偵が神で、人間は究極的にはみな犯罪者であるとい

う論に、なるほどと思った。しかし、我々が神を考える時、神は最後の謎を解く探偵のポジションに想定されるのか、それとも我々に謎を仕掛けてくる究極的犯罪者、完全犯罪者で、神を我々が探しているのか、両方の可能性があるのではないか。

金氏の応答

わからないという返答をせざるを得ない。エルンスト・ブロッホの『探偵小説の哲学的考察』というエッセイで、「最初に犯罪あり」といわれているように、これは善と悪の戦いといった世界の構造、一つの世界観なのかもしれない。中村氏のこのような究極的な謎につながる問題ではないか。

探偵小説では、誰が犯人か、原因は個人か社会かと、色々なことを探るが、結局のところ神秘は神秘で残る。神を探偵として考えるのも、人間がやはりそういうことを解明してくれる誰かを必要とするからではないか。神を模倣して、人間はこの分からないことを究明しようとするが、神も、解明されるべき謎も、解明しようとする人間も、結局は神秘のまま残るのではないか。そこで、神のような何かの存在によって和解されたいと願うのではないか。

全体討論

その後の討論では、中村氏や鶴岡氏の人間あるいは探偵の側が謎を作り出しているという発言に関連して、小松氏から、近年の「新本格」と呼ばれる作家達の書くメタミステリーに示された問題意識についての発言があった。それについて、ミステリー小説の内部では探偵が謎を解決してみせるが、その物語構造の外側に不可能な謎として残るものがあること、探偵が謎や犯罪を作り出してしまう面があることも、ミステリーというジャンルの一つの魅力ではないかといった問題について議論が続いた。

最後に司会者から、金氏のいう世俗的な神学や否定神学と、小松氏の紹介した新宗教を「色と金」の話で批判的に描く小説が、ともに通常の意味での宗教的なものに否定的な形を取りながら、逆説的に宗教性や神秘と呼び得るようなものに深くつながっていることや、中村氏の指摘する、謎の体験や神秘の存在が結局は読み手に帰する認識論的でも実存的でもあるような問題であることについてコメントがあった。より多くの事例についての検討が求められるような、文学と宗教性という問題領域の重要性和面白さを感じさせる内容であったことが確認され、本シンポジウムは締めくくられた。

いせき・だいすけ
(南山宗教文化研究所)